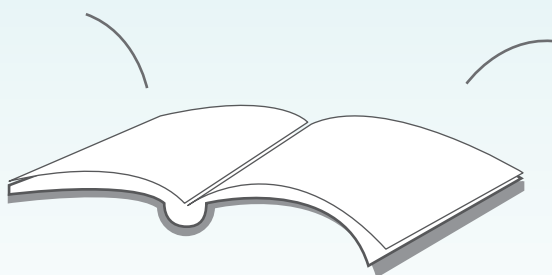


筑波大学朝永振一郎記念
「科学の芽」賞

20周年記念誌



$$i\hbar \frac{\delta \bar{\Psi}[C]}{\delta C_P} = H_{int}(P) \bar{\Psi}[C]$$



目次

「科学の芽」賞創設 20 周年に寄せて	
筑波大学長	1
「科学の芽」賞実行委員長	2
特別寄稿	
谷川 彰英	3
小林 汎	5
朝永振一郎博士と朝永記念室	6
朝永振一郎先生と 「科学の芽」 賞	7
沿革	
第 1 回～第 10 回	8
第 11 回～第 20 回	10
「科学の芽」賞に輝いた児童・生徒の集合写真	
第 1 回～第 19 回	12
科学の芽から広がる世界	16
先輩受賞者からのメッセージ	20
寄付者一覧	24
編集後記	25

「科学の芽」 賞創設 20 周年に寄せて

筑波大学 学長
永田 恭介



筑波大学朝永振一郎記念「科学の芽」賞は、筑波大学の前身である東京教育大学の学長を務められた、ノーベル物理学賞受賞者・朝永振一郎博士の生誕 100 年を記念する行事の一環として、2006 年に創設されました。博士が生涯を通じて大切にされた、問いを持ち、考え抜く力を、次世代を担う子どもたちに継承したいという願いが、この賞の原点です。

記念行事として一回限りの企画として実施した「科学の芽」賞でしたが、全国から寄せられた子どもたちの応募作品は、いずれも子どもらしい純粋な着眼点とアイデアに富み、科学への真摯なまなざしに満ちていました。その輝きに心を打たれた大学役員らの判断により、本賞は一過性の企画にとどまらず、継続的な取り組みとして歩みを進めることとなりました。以来 20 年にわたり、「科学の芽」賞は、未来の科学者たちの発表の場所となってきました。

この 20 年の間、私たち人類は、これまで予想もできなかった危機に幾度も直面してきました。東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の事故、新型コロナウイルスによる世界的パンデミック、そして加速する気候変動など、想定を超える出来事が相次いでいます。こうした困難な時代においてこそ、科学を正しく理解し、活用する力の重要性は、かつてないほど高まっています。科学は、恐れや混乱を乗り越え、冷静に課題と向き合い未来への希望を築くための力を育てます。「科学の芽」賞は、そうした科学の本質を、子どもたち自身が体験し、表現する貴重な機会を提供してきました。身近な疑問を出発点に、自ら問いを立て、仮説を立てて検証し、多様な自然事象を理解しようとする営みは、まさに科学の原点であり、未来を切り拓く力そのものです。

本賞がこれまで継続できたのは、賞に応募してくださった多くの子どもたちのおかげです。日々教育現場で、子どもたちによる「科学の芽」の発見を助け、見守り育んでくださっている先生方、それを支えてくださったご家族の皆様、そして挑戦を重ねてきた応募者の皆さんに、心より敬意を表します。また、本賞の運営に尽力いただいた実行委員や審査員の先生方なくしては、20 年にわたる継続は成し得なかったことでしょう。筑波大学は研究型総合大学として、自然科学をはじめとして専門を異にする多くの教員を擁するとともに、11 の附属学校に在職する理科教員の高い専門性と熱意に支えられて、小・中・高の幅広い年齢層から寄せられる多様な作品に対し、厳正な審査を続けることができました。

20 周年という節目を迎えた今、これまでの歩みを振り返るとともに、「科学の芽」賞がこれからも多くの若者にとって、科学の扉を開くきっかけとなることを、心より願っております。筑波大学と附属学校群は、今後も「科学の芽」を育む豊かな土壌として、皆様とともに歩み続けてまいります。

「科学の芽」 賞創設 20 周年に寄せて

副学長・附属学校教育長・「科学の芽」賞実行委員会委員長
呑海 沙織



「ふしぎだと思うこと　これが科学の芽です」

この言葉は、ノーベル物理学賞受賞者であり、筑波大学の前身・東京教育大学の学長を務められた朝永振一郎博士が、子どもたちに向けて書かれた色紙の一節です。色紙の中では、芽生えた「科学の芽」は、「科学の茎」を経て「科学の花」へと成長していきます。博士が生涯を通じて大切にされた、問いを持ち、考え抜く力は、2006 年に創設された「科学の芽」賞の理念として、今日まで私たちの活動の根幹を支えてきました。

創設以来 20 年にわたり、「科学の芽」賞には、全国の子どもたちから数多くの作品が寄せられてきました。その一つひとつに、身近な事象の観察などから芽生えた純粋な疑問と子どもならではの自由な発想が満ち溢れており、審査にあたる我々を楽しませ感銘を与えてくれました。子どもたちが自ら問いを立て、仮説を立てて検証し、考察を深めていく姿は、まさに科学の原点であり、未来を切り拓く力そのものです。

こうした探究の営みは、子どもたちの力だけで成し遂げられるものではありません。未熟なところもある子どもたちと日々の活動とともにし、科学とは何かを根気強く指導してくださった先生方、子どもたちの挑戦を温かく見守ってくださった保護者の皆様のご支援があってこそ、「科学の芽」賞は歩み続けることができました。この場を借りて、皆様に心より感謝申し上げます。

そして今年、記念すべき第 20 回の表彰式・発表会には、「科学の芽」賞の受賞経験をもち、現在は研究機関や企業などで活躍されている受賞 OB・OG の皆さんをお招きすることとなりました。かつて「科学の芽」を育んだ若者たちが、今や社会の中で重要な役割を担うこととなり、次世代の子どもたちの「科学の芽」を育てる側へと歩みを進めていることは、私たちにとって何よりの喜びです。

これからの「科学の芽」賞は、単なるコンクールにとどまらず、応募をきっかけとして継続的に研究を深めていける仕組みへと進化していきたいと考えています。受賞 OB・OG の知見や経験を活かし、研究機関や企業との連携を図ることで、子どもたちが自らの問いをさらに発展させ、長期的な探究へとつなげていけるような環境づくりを目指します。

科学とは、問いを持ち続けること、そしてその問いに向き合い続けることです。「科学の芽」賞が、子どもたちにとってその第一歩となり、やがて社会の中で科学研究を担う人材へと育てていく、そんな未来を描きながら、私たちはこの賞をこれからも続けてまいります。20 周年という節目を迎えた今、これまでの歩みを振り返るとともに、「科学の芽」賞がこれからも多くの若者にとって、科学の扉を開くきっかけとなることを、心より願っております。

「科学の芽」 賞の眼（め）　—科学する心

谷川 彰英

1 朝永振一郎博士生誕 100 年記念

「科学の芽」賞 20 周年、本当ですか。感無量です。よくぞ 20 年も継続していただきました。心より感謝するとともにお祝い申し上げます。

朝永先生は 1906 年にお生まれです。朝永振一郎博士生誕 100 年行事は 2006 年の秋に行われたはず。岩崎洋一学長からこの記念行事を京大・阪大と並んで行いたいとの話を聞いたのは、同年 3 月だったと記憶しています。当然物理学系では記念行事を企画するはずでした。

私は昔のことを思い起こしていました。朝永先生がノーベル賞を受賞されたのは 1965 年の秋のことですので、私が東京教育大教育学科 2 年次のことでした。何しろ湯川秀樹博士に続く日本人として 2 人目のノーベル賞受賞者です。日本中がお祝いムードに包まれました。狭い大塚キャンパスにも大きなお祝いの看板が掲げられ、実は何も関係もないのに、自分たちも偉くなったように錯覚していました（笑）。

岩崎学長の話聞きながら、私の脳裡に一つのアイデアがひらめきました。それが「科学の芽」賞の発端でした。どんな偉人の場合でも「生誕 100 年記念」と銘打たれば、100 年に 1 度のイベントで終わってしまいます。それでは余りにももったいないと私は考えました。そこで思い付いたのが小中高校生を対象に科学の研究リポートを募集し、優れた作品に朝永振一郎記念賞のようなもので表彰しようという構想でした。

2 附属学校への危機感

その背景には当時の附属学校に対する危機意識がありました。筑波大学の附属学校はいずれも近代の日本の教育をリードしてきた実績を持つ学校です。しかしそれ故のひずみも生じていたことも事実です。最大の問題は各学校と大学本体との連携が希薄になっていたことでした。これには地理的な条件も要因もありました。大学本体は茨城県にあるのに、附属 11 校は東京都・千葉県・埼玉県・神奈川県に点在しています。よほどしっかりした管理局を設けないと潤滑な運営は望めない。それが附属学校教育局を設けた趣旨でした。

私が教育長としてまず取り組んだのは、筑波大学の附属学校の実態を内外に発信することだと考え、『ポローニア』という小冊子を季刊で発行することにしました。さらにその延長として全附属学校の沿革と指針をまとめた『日本の教育を拓く—筑波大学附属学校の魅力』（晶文社、2006 年）を出版しました。これは私の発案でしたので、原稿依頼から校正まで全て 1 人でやり抜きました。この本の出版で附属学校間の相互理解が深まり、結束力も強くなったように感じました。

次に考えたのは、附属学校の教員の筑波大学の所属意識を高めることでした。そのためには教育局と附属学校との心理的距離感を縮めることが必要でした。その対応策として附属学校の教員を教育局所属の教授に抜擢する策を立て、ここに教育長を支えるピラミッド型の組織ができ上がったのでした。附属小学校から坪田先生、附属駒場中高から小林先生という強力な助っ人を得て、教育局は息を吹き返した感じがしました。そして究極的に目指したのは、大学主催の行事に附属学校の教員に参加してもらうことでした。その先鞭をつけたのが「科学の芽」賞だったのです。実はこの他に附属学校の教員が全学挙げての一大プロジェクトに貢献したケースとして、教員免許状更新講習がありますが、長くなるので割愛することにします。

3 「科学の芽」の発見！

2006 年 4 月の某日、私はある決意をもって東京駅北口の丸善書店に向かいました。何時間かけても今日中にコンクールの名前を決めたいという一心でした。丸善書店は私にとっては知恵袋のような存在でしたが、いかんせん私は物理学とは無縁の純粋の文系の人間。賞のネーミングについての見通しなど全くありませんでした。

3 階の物理学書のコーナーの前に立った時もほぼ絶望的でした。これまで読んだことのない難解な本がずらり。こりゃ無理だなと諦めかけた時、ふと 1 冊の本が目にとまりました。書名は忘れましたが、その中に思いもかけぬ言葉が書かれているのを発見しました。

ふしぎだと思うこと これが科学の芽です

よく観察してたしかめ そして考えること これが科学の茎です

そうして最後になぞがとける これが科学の花です

この言葉を発見した時の衝撃と感動は、たとえて言えば地球探検家が南極大陸を発見した時のそれに匹敵するものでした。「これだ！！」と直感したその瞬間に、賞の名前は「科学の芽」賞に決まりました。

この言葉は、1974 年 11 月 6 日に国立京都国際会館において、湯川秀樹・朝永振一郎・江崎玲於奈の三人の博士による座談会が開催された際に、「子どもたちに向けた言葉を」との要請に応えて、朝永博士が色紙（京都市青少年科学センター所蔵）に書かれたものであることも記してありました。三人のうちお二人が筑波大学関係者であったことは、今にして思えば不思議な縁を感じます。

賞の名前が決まったらあとはとんとん拍子に進みました。中でも毎日新聞社の協賛を得たことは画期的なことでした。それまで新聞社が企画した行事に大学が協賛することはあったにしても、一国立大学が主宰する行事に大手新聞社が協賛するということは稀有なことだと思いました。

幸運は重なりました。賞状と記念品の製作は、当時の教育局とも関りが深かったデザイン会社をお願いしました。さらに同社には「科学の芽」賞の入選作品を載せた『もっと知りたい！「科学の芽」の世界』（筑波大学出版会）を出版するに当たり、カバーデザインを担当していただきました。筑波大学出版会が設立されたのは 2008 年のことですが、私は翌年 3 月退職後も特任教授として残り、2 年間にわたって初代編集長を務めました。これも幸運でした。

2006 年 12 月 23 日、筑波大学大学会館で「科学の芽」賞の授賞式が行われました。21 名の受賞者のご両親、さらにおじいちゃん・おばあちゃんまで、100 名に及ぶ関係者が全国から駆け付けてくれました。それを見て「科学の芽」賞の反響の大きさを実感しました。と同時にこのプロジェクトは筑波大学の社会貢献の最たるものになると確信しました。

私の予測は間違っていなかったようです。あとは受賞者の中からノーベル賞受賞者が出るのを待つだけです。

4 「科学する心」

このご挨拶に「科学する心」と銘打ちました。さりげない言葉ですが、ここには学問と教育についての私の強い思いが込められています。「ふしぎだと思うこと これが科学の芽です」という言葉を目にした時に体に電撃が走るような感動を覚えたのは、私が民俗学者の柳田国男の研究者だったからでした。

私は博論で柳田国男の教育思想の成立過程をまとめたのですが、知れば知るほど柳田国男の学問観と教育観に魅せられていきました。先生の思想は一言で言うと「学問と教育の一体」論でした。学問は「世のため人のために」役立つものでなければとして民俗学を興し、その成果を教育に生かそうとしたのです。晩年には国語と社会科の教科書の編纂に力を尽くしました。

柳田学はよく「問いの科学」と呼ばれることがありますが、その趣旨は学問は日常の素朴な疑問から出発しなければならないというところにありました。先生は「彼等くらい経験の浅い者（子ども、谷川註）が、自ら知ろうとする問いにも答えられぬようだったら、我々の学問などはおおよそ無用なものです」（「社会科教育民間伝承」）とさえ言い切っています。学問のジャンルを超えて、この言葉は普遍的な真理のように思います。

また先生は歴史教育の目的は「史心の育成」としました。「史心」とは「歴史をとらえる心」のことですが、「歴史する心」と読み替えることも可能です。私は全ての学問の中核にあるのはこのような意味での「心」だと考えています。学問とは「問いを学ぶ」という意味ですが、「心」がなかったら問いを学び続けることは到底できません。

学問の「心」を支えるものは「わくわくどきどき感」だと私は考えています。これまで柳田国男先生・谷川健一先生の後を追いかけて数十冊の地名本を世に問うてきましたが、今でも地名について書く時は「わくわくどきどき感」を抑えることができません。これは心の中にとまった灯が消えていないからです。

教育の、そして教師の役割は、一人ひとりの子どもの中にあるこの「わくわくどきどき感」に灯をともしてあげることだと、私は考えるのです。

記憶をたどりながら「科学の芽」賞の眼について述べてきました。20 年前の創設時には文字通り「芽」でしかなかった「科学の芽」賞も今や立派な「茎」に成長し、近い将来大輪の「花」を咲かせることでしょう。30 周年、40 周年を目指して頑張ってください。これは約束です。

（元 国立大学法人筑波大学 理事・副学長・附属学校教育局教育長・教授・特任教授）

「科学の芽」賞言いだしっぺから

小林 汎

筑波大学と附属学校が連携して取り組んでいる朝永振一郎記念「科学の芽」賞が、今年で 20 年となりました。2006 年に「筑駒」の副校長として、当時の谷川彰英教育長（副学長・理事）に提案し、実現に漕ぎ着けたことは、本当に良かったなと思っています。附属 11 校を有する筑波大学ならではの取り組みであり、全国的に見ても、科学に関心のある子どもを育てる貴重な取り組みだと確信しています。

これまでに応募した児童・生徒総数は 48,372 人となり、学校奨励賞を受賞した学校は 381 校にも及びます。当時、小学生だった子どもも、社会人として様々な分野で活躍していることと思います。附属学校の社会貢献として、意味のある取り組みだと思います。

今から 50 年前、朝永振一郎氏は湯川秀樹氏と連名で『「核抑止を超えて」―湯川・朝永宣言』（1975 年 9 月 1 日、京都）を出しています。「私たちの究極目標は、人類の経済的福祉と社会正義が実現され、さらに、自然環境との調和を保ち、人間が人間らしく生きることのできるような新しい世界秩序を創造することである」と宣言しています。21 世紀の科学技術の発展の中で「科学者の社会的責任」をきちんと果たせるような科学者を育てることは今日的な課題でもあるでしょう。

「継続は力なり！」ですが、マンネリ化した取り組みは、負担に感じて衰退していくものです。常に“革新する”、応募する児童・生徒が目目を光らせて、熱心に取り組んでいる様子を思い浮かべて、前向き姿勢で「科学の芽」賞に取り組んで欲しいと思います。今後の発展を期待します！

（寿喜を過ぎた「団塊世代」の 0B から一言）

（元 国立大学法人筑波大学 教授・附属学校教育局教育長補佐・附属駒場中・高等学校副校長）

朝永振一郎博士と朝永記念室

受川 史彦、山崎 剛、金谷 和至

朝永振一郎博士は、戦中戦後の厳しい時代に、筑波大学の前身である東京文理科大学および東京教育大学において、素粒子の電磁相互作用を精密に記述する相対論的量子場の理論を構築し、1965年には日本人として二人目となるノーベル賞を受賞しました。朝永博士は1979年に逝去しましたが、その後、筑波大学では同氏を記念する事業がいくつか検討され、そのひとつが朝永記念室の設立です。博士の物理学における業績を永く記念し、大学の伝統として継承して行く目的で、1983年9月29日に開室されました（下図左）。博士に関係のある各種の資料・蔵書・写真・遺品等を保存し、またその一部を常設展示しています。その設立には、当時の物理学系教授の亀淵迪先生が尽力しました。

その後、2006年の「朝永振一郎博士生誕100年記念事業」の一環として、資料の一部をデジタル化しオンラインで紹介するwebサイト <https://tomonaga.tsukuba.ac.jp/> を開設しました（下図右）。同じ年に開始されたのが、「科学の芽」賞です。同サイトでは、賞の案内やこれまでの作品・記念品等を掲載しています。

朝永記念室の展示室は翌2007年に筑波キャンパス大学会館の筑波大学ギャラリー内に移転・改装し、現在に到っています。展示室内には、「科学の芽」賞のガラスケースがあり、ポスターや記念品の実物を展示しています。筑波キャンパスを来訪する機会があれば、ぜひお立ち寄りください。

（筑波大学教授、筑波大学准教授、筑波大学名誉教授・特令教授）



朝永記念室創設時の看板



朝永記念室 web サイト

朝永振一郎先生と「科学の芽」賞

朝永振一郎先生は、日本で二人目のノーベル物理学賞を受賞した科学者です。1965年、量子電磁力学という分野で世界的な理論を築き、リチャード・ファインマンやジュリアン・シュウィンガーとともに受賞しました。けれど、先生は「偉い人」というより、子どもたちの「ふしぎだと思う心」を何よりも大切にしたい、やさしくてユーモアのある教育者でもありました。

「ふしぎだと思うこと　これが科学の芽です

よく観察してたしかめ　そして考えること　これが科学の茎です

そうして最後になぞがとける　これが科学の花です」

この言葉は、1974年、京都で行われた座談会で、先生が子どもたちに向けて色紙に記したものです。習字が苦手だった先生が、断り切れずに書いたこの色紙は、科学する心の本質をやさしく、詩的に言い表したもののとして、今も多くの人々に受け継がれています。

先生は、病気がちだった少年時代、寝床の上でボール紙や糊を使って家の模型を作ったり、自作のピンホールカメラ（小さな穴を通して光を集め画像を写すカメラ）を虫眼鏡を使って改良したり、寒天と青写真の薬で幻灯板（幻灯機で画像を拡大してスクリーンに投影するガラス板）を作ったりと、身近な材料で実験を重ねました。ガラス管の切れはしを溶かしてレンズを作り顕微鏡を改良して、古井戸の水の中のツリガネムシを観察したこともあります。こうした工夫と好奇心が、後の研究者としての土台となりました。

先生は1972年の講演の中で「好奇心は人間の本能に根ざしている」ことを語り、情報にあふれた現代社会だからこそ、自分の知的な要求がどこにあるのか考えて「知識への渇き」を大切にしたいと呼びかけています。

この朝永振一郎先生を受け継ぐ形で、筑波大学では附属学校教育局を中心とし2006年、「科学の芽」賞を創設しました。先生は、筑波大学の前身である東京教育大学の学長を務められた方でもあります。子どもたちが自然の「ふしぎ」に気づき、それを観察し、考え、表現する過程を大切にするこの賞は、完成された研究だけではなく、芽生えた疑問そのものにも価値を見出します。

20年の歩みの中で、全国から寄せられた作品は、自由な発想と真摯な探究心に満ちていました。科学の芽は、茎を伸ばし、やがて花を咲かせます。その過程を見守り、支える「科学の芽」賞は、これからも先生の言葉とともに、未来の科学者たちの探究心を刺激し、支援してまいります。

「科学の芽」賞実行委員会編、もっと知りたい！「科学の芽」の世界 Part2、筑波大学出版会、2010

朝永先生と「科学の芽」の世界 金谷和至 より 再構成



朝永振一郎博士

朝永振一郎博士生誕 100 年記念行事の一環として、
小林汎氏（当時の附属駒場高等学校副校長）が小中高校生向け科学コンクールの創設を提案、
谷川彰英氏（当時の附属学校教育局教育長）が実行委員会に諮り「科学の芽」賞と命名

回／開催年	第一回 2006 年	第二回 2007 年	第三回 2008 年	第四回 2009 年	第五回 2010 年
作品数	小学生部門： 281 件 中学生部門： 328 件 高校生部門： 36 件 合計： 645 件	小学生部門： 411 件 中学生部門： 416 件 高校生部門： 19 件 合計： 846 件	小学生部門： 682 件 中学生部門： 519 件 高校生部門： 47 件 合計： 1,248 件	小学生部門： 596 件 中学生部門： 530 件 高校生部門： 32 件 合計： 1,158 件	小学生部門： 588 件 中学生部門： 737 件 高校生部門： 50 件 合計： 1,375 件
トピックス	・応募者全員に参加賞（記念品）を授与 ・「科学の芽」賞「奨励賞」「学校奨励賞」を設定	・児童・生徒の応募作品が優秀で、2 年目以降の継続を決定	・第 1 回 2 回 受賞作品集 「もっと知りたい！『科学の芽』の世界」刊行	・「科学の芽」賞・奨励賞の受賞者および学校奨励賞の受賞校の 担当者を対象にアンケートを実施 ・「努力賞」を設定 ・第 3 回 4 回 受賞作品集 「もっと知りたい！『科学の芽』の世界PART2」刊行	・「科学の芽」賞・奨励賞の受賞者および学校奨励賞の受賞校の 担当者を対象にアンケートを実施 ・「努力賞」を設定 ・第 3 回 4 回 受賞作品集 「もっと知りたい！『科学の芽』の世界PART2」刊行

ポスター／記念楕











第六回 2011 年	第七回 2012 年	第八回 2013 年	第九回 2014 年	第十回 2015 年
小学生部門： 608 件 中学生部門： 1,602 件 高校生部門： 65 件 合計： 2,275 件	小学生部門： 874 件 中学生部門： 1,629 件 高校生部門： 120 件 合計： 2,623 件	小学生部門： 917 件 中学生部門： 1,070 件 高校生部門： 63 件 合計： 2,050 件	小学生部門： 799 件 中学生部門： 1,258 件 高校生部門： 98 件 合計： 2,155 件	小学生部門： 816 件 中学生部門： 1,402 件 高校生部門： 162 件 合計： 2,380 件
・「科学の芽」賞に積極的に関わっている指導者を招き「科学の芽」賞 について語る座談会を開催	・第 5 回 6 回 受賞作品集 「もっと知りたい！『科学の芽』の世界PART3」刊行		・第 7 回 8 回 受賞作品集 「もっと知りたい！『科学の芽』の世界PART4」刊行	・10 周年を記念して学長特別賞を長野佑香さん（小 4）に授与 ・10 周年記念行事（シンポジウム）を実施

ポスター／記念楕











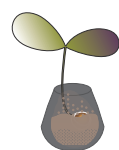
沿革

回／開催年	第十一回 2016年	第十二回 2017年	第十三回 2018年	第十四回 2019年	第十五回 2020年
作品数	小学生部門：1,050件 中学生部門：1,736件 高校生部門：133件 合計：2,919件	小学生部門：924件 中学生部門：1,936件 高校生部門：226件 合計：3,086件	小学生部門：982件 中学生部門：1,711件 高校生部門：160件 合計：2,853件	小学生部門：1,106件 中学生部門：1,719件 高校生部門：530件 合計：3,355件	小学生部門：897件 中学生部門：934件 高校生部門：285件 合計：2,116件
トピックス	・第9回10回受賞作品集「もっと知りたい!『科学の芽』の世界PART5」刊行 ・「探究賞」(特別支援学校(知的障害)対象)を設定 ・「G7茨城・つくば科学技術大臣会合応援事業」へ登録	・Tsukuba Global Science Week (TGSW2017) に「科学の芽から研究者へ」科学の芽受賞者の研究と今」の企画で「科学の芽」賞OB・OG受賞者6名が参加	・「科学の芽」賞応募システムを構築 ・第11回12回受賞作品集「もっと知りたい!『科学の芽』の世界PART6」刊行	・「科学の芽」賞応募システムに教員応募機能を搭載	・新型コロナウイルスの感染拡大の為、オンラインで表彰式・発表会を開催 ・第13回14回受賞作品集「もっと知りたい!『科学の芽』の世界PART7」刊行

ポスター／記念楕

第十六回 2021年	第十七回 2022年	第十八回 2023年	第十九回 2024年	第二十回 2025年
小学生部門：1,100件 中学生部門：1,055件 高校生部門：286件 合計：2,441件	小学生部門：939件 中学生部門：1,114件 高校生部門：275件 合計：2,328件	小学生部門：723件 中学生部門：1,195件 高校生部門：292件 合計：2,210件	小学生部門：838件 中学生部門：1,277件 高校生部門：262件 合計：2,377件	小学生部門：903件 中学生部門：1,127件 高校生部門：492件 合計：2,522件
・新型コロナウイルスの感染拡大の為、オンラインで表彰式・発表会を開催	・対面による表彰式・発表会を再開 ・過去の「科学の芽」賞受賞者を招待し「OB・OGミニ講演」を開催 ・第15回16回受賞作品集「もっと知りたい!『科学の芽』の世界PART8」刊行 ・研究支援として「中高生のための研究サポート動画」をリンク開始(筑波大学GFEST作成)	・「奨励賞」「努力賞」「探究賞」作品にも審査コメント送付を開始 ・実行委員会内に審査部会を設置	・第17回18回受賞作品集「もっと知りたい!『科学の芽』の世界PART9」刊行 ・「科学の芽」賞応募システムにCSVアップロード機能を搭載 ・「科学の芽」賞における生成系AIの使用について」公開 ・「科学の芽の肥料(こやし)」入門編(研究倫理をやさしく学ぼう!)」公開	・20周年記念行事を実施 ・クラウドファンディングを実施 ・高校生部門は要旨を提出し、電子データーでの提出も受付 ・参考文献の書き方」公開

ポスター／記念楕



第1回～第19回

朝永振一郎記念「科学の芽」賞表彰式・発表会 「科学の芽」賞に輝いた児童・生徒の集合写真



◀第1回(2006年)
平成18年12月23日(土)

学 長：岩崎 洋一
委員長：谷川 彰英



◀第2回(2007年)
平成19年12月22日(土)

学 長：岩崎 洋一
委員長：谷川 彰英



◀第3回(2008年)
平成20年12月20日(土)

学 長：岩崎 洋一
委員長：谷川 彰英



◀第4回(2009年)
平成21年12月19日(土)

学 長：山田 信博
委員長：阿部 生雄



◀第5回(2010年)
平成22年12月18日(土)

学 長：山田 信博
委員長：阿部 生雄



◀第6回(2011年)
平成23年12月23日(金)

学 長：山田 信博
委員長：東 照雄



◀第7回(2012年)
平成24年12月22日(土)

学 長：山田 信博
委員長：東 照雄



◀第8回(2013年)
平成25年12月21日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：石隈 利紀



◀第9回(2014年)
平成26年12月20日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：石隈 利紀



◀第10回(2015年)
平成27年12月19日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：石隈 利紀



◀第11回(2016年)
平成28年12月17日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：宮本 信也



◀第12回(2017年)
平成29年12月23日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：宮本 信也



◀第13回(2018年)
平成30年12月22日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：茂呂 雄二



◀第14回(2019年)
令和元年12月21日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：茂呂 雄二



◀第15回(2020年)
令和2年12月19日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：茂呂 雄二



◀第16回(2021年)
令和3年12月18日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：溝上智恵子



◀第17回(2022年)
令和4年12月17日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：溝上智恵子



◀第18回(2023年)
令和5年12月23日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：呑海 沙織



◀第19回(2024年)
令和6年12月21日(土)

学 長：永田 恭介
委員長：呑海 沙織



科学の芽から広がる世界

「科学の芽」賞を受賞した先輩方からご寄稿いただきました

科学の芽によって生まれた自信と好奇心

この寄稿に当たって、科学の芽について、深く考えてみました。

その結果、筑波大学が主催する「科学の芽」賞への挑戦と受賞という経験は単なる学生自体の思い出ではなく、その後の人生に大きな影響を与えていたことに気づかされました。

1つ目は自信を獲得したことです。

できるかどうかは生まれつきで決まっていて、努力しても無駄。そんな自己否定感に満ちているときもありました。しかし、そんなときに「科学の芽」の受賞は私に自信をくれました。この自信は、その後の学業や、新しい分野に挑戦する際の原動力となり、難題に直面しても粘り強く取り組む姿勢を支えています。

2つ目は好奇心を獲得したことです。

何事も冷めた目で見ていた私でしたが、今では何においても好奇心を持つようになりました。特に自動車に使われている技術には興味があり、今でも旧車の部品を自分で研究して作っています。旧車の部品は生産終了しており、手に入りづらい部品もありますが、好奇心によって、自分で部品を再生することに成功しております。これも科学の芽のおかげで豊かな好奇心が育まれたことによるものだと思います。

このように、「科学の芽」の受賞経験は、私に「やればできる」という自信を与え、好奇心に基づいて探究し続ける姿勢を教えてくださいました。この学びこそが、私の今と未来を形作る礎となっています。

(第2回受賞者 杉浦 健)

巻貝から始まった「手で考える研究」

小学校6年の時に「ぐるぐる巻くもの」について研究し、翌年その発展として「貝のカタチというもの」という題名で「科学の芽」賞に応募しました。巻貝の成長にはどんなルールがあるのかを知りたくなり、オウムガイやサザエ、アワビなどを相似な三角形の重なりとしてモデル化し、広告紙を切って巻き貝の模型を作っては角度や巻き数をひたすらノートに書き出しました。大人になってから読み返すと、指摘したい部分も多く、実際の貝殻にきれいには当てはまらず中途半端な調査になっているように見えますが、自然の形を数式と模型でなんとか理解しようともがいた時間は、今振り返ると贅沢な経験でした。

決して優等生ではなく、ペーパーテストも苦手で、図画工作や美術、技術家庭の時間はいつも待ち遠しく、手を動かしながら考えることでしかわからないことがあると日々感じていました。

この「手を動かしながら考える」感覚こそが、今の仕事につながる最初の手応えだったと思います。現在の私は金属を用いた大きな作品をつくる現代美術家であり、筑波大学で教員を務めながら研究を行っています。作品の設計にはCADも使いますが、複雑な構造を考えるときには、どんなに巨大な作品でも、当時と変わらずコピー用紙を切って模型を作り、手を動かしながら仕組みを確かめます。

通っていた筑波大学附属小学校、中学校、高校では、自由研究のレポートを「研究」と呼び、児童・生徒が自分のテーマを立てて発表することが当たり前の環境がありました。そのおかげで、東京藝術大学に進学してからも、作品制作とは別に、プロセスを言葉で整理し社会に開いていく研究の姿勢を自然に受け入れられたのだと思います。「科学の芽」賞は「手を動かして考え、ことばで確かめる」という、今の私の仕事と研究の両方の原点だと感じています。

(第5回受賞者 東 弘一郎 筑波大学芸術系)

「ふしぎだと思うこと」

実家の庭に二本の木がある。片方は樹齢80年はゆうに越えているだろうか、直線的に伸びた幹がどっしりと構える。もう一方は幹が細いものの、ひたすら天を目指し枝葉を伸ばす。

幼い頃、庭で栗の実を拾った。イガを落とした木を見上げ、この小さな実がどうやってあれほど大きな木になるのだろうか、と不思議に思った。

発芽までの道は長かった。図鑑を調べたり、家族に栗の木がたくさんあるところへ連れて行ってもらったりした。発芽には気温、日当たり、土壌など様々な環境が関係することを知った。やがて、実は小さな芽を出した。イガを落とした木は「お母さんの木」、発芽し育てた木は「子どもの木」と呼ぶことにした。

栗の木に関する研究を通して、素晴らしい出会いがあった。「科学の芽」賞の授賞式では、同じように研究をしてきた仲間と語り合うことができた。また、朝永振一郎博士の「ふしぎだと思うこと これが科学の芽です」という言葉にも出会った。

今も私は様々な「ふしぎ」を追い続けている。本を読む過程で「言葉」に興味を持つようになった。科学者の残した言葉からは、様々な葛藤を読み取れる。大学院に進んで日本文学を専攻し、学内の雑誌に自分の論文を掲載させていただくこともできた。

大人になっても変わっていないことがある。それは、研究することが好き、ということだ。すぐに答えの出ない問いについて考え続けることが好きだ。あらゆる手段で調べ、考察し、誰かと意見を交えることが好きだ。

もちろん、社会には効率や成果を重視する価値観も根強くあるだろう。「好き」の気持ちだけではどうにもならないこともあるかもしれない。それでも、これから研究を始めようとする人たちには、根本にある「もっと知りたい」という思いをずっと忘れないでいてほしい。そうすれば、いつか思いもよらない花を見られる日が来るだろう。

秋田の庭は、冬を前に囲いをする。庭の木々も雪で潰されないよう厳重に覆われ、これから長い冬を耐えることになる。

春になったら、またお母さんの木と子どもの木に会いに行こうと思う。

(第1回・2回・3回受賞者 渡部 京香)

科学の芽が育ち、技術者の幹となり、知識の枝葉を広げた

「科学の芽」賞では、身近な「なぜだろう?」に対して仮説を立て、課題解決のための実験方法を模索する力を身につけることができました。特に、情報を分析し自分の言葉で伝える力は、アイデアを形にするエンジニアの基盤となり、高専と大学院での研究活動に活かされています。

研究では、次々と疑問や課題が浮かび上がり、時間をかけて考えることも多くありますが、解決の糸口を見つけられたときの達成感は非常に大きいものでした。その過程で、機械系の専門知識に加え、関連分野の知識を積極的に学ぶ姿勢が身についたことを実感しました。

現在は、CT画像から作成した人の骨の3Dモデルを用いて、関節に加わる力の分布や骨折の発生位置の予測を目指す医学と工学が融合した研究に取り組んでいます。解析には、材料の変形や破壊に関する知識に加え、整形外科の知識が求められるため、日々勉強を重ねながら試行錯誤を繰り返しています。粘り強く取り組めているのは、高専での学びを通じて自分の取り組んでいる研究が社会にどのように貢献するかを意識するようになったからです。

5年間の研究活動を通じて、「科学の芽」賞の理念である、身の回りで感じる「なぜだろう?」を探究し、自分の言葉で伝えることは、未来を広げる原動力になると信じています。

(第12回受賞者)

「科学の芽」 賞とわたし

私は、現在医師をめざして勉強に励んでいます。来年からは病院実習が始まり、白衣授与を楽しみに待っているところです。幼い頃から医師として働くことに憧れていましたが、最近医学研究にも興味が湧いてきました。きっかけは、大学３年生のときに循環器内科の研究室に所属し、今年の７月に日本循環器学会で研究発表をさせて頂いたことです。

私が「科学の芽」賞を頂いたのは中学生のときが最後で、高校時代には自由研究がなかったため、研究をするのはとても久しぶりででした。しかし、始めてみると小中学生時代の自由研究の楽しさが蘇り、気づけば毎日研究内容について考え、資料を作る日々になっていました。思い返すと「科学の芽」賞は、私に疑問を見つけ、考えを巡らせる癖のようなものを植え付けてくれたような気がします。

初めて賞を頂いたときは、ただ気になったことについて自由に考え、実験や考察をしたという感覚だったため、受賞を知ってとても驚いたのを覚えています。また、発表会では先生が研究内容にちなんで紙ふぶきを舞わせる演出をしてくださり、緊張がほぐれて楽しく発表ができたのもとても素敵な思い出です。それ以降も２度、賞を頂きましたが、どちらもふとした疑問に対して、楽しく試行錯誤してみた結果が賞に繋がっていたように思います。

自分の自由な考えを認めてもらえたというこの経験は、私にとってとても大きく、今でも自分の考えを深めていく時の自信の源になっています。もとからひとつの事柄をじっくり考えることは好きでしたが、この経験を通して、疑問を見つけ、考えてみることにさらに意欲的になり、自由研究から離れて何年も経った今年の学会の方でも、賞を頂くことができました。

疑問を見つけることやじっくり考えてみることは、少し好き嫌いが分かれることかもしれませんが、私にとってはとても楽しく、夢中になれることの１つです。そしてその楽しさを私の心に深く刻んでくれたのは、「科学の芽」賞だったなと思います。

20周年記念、本当におめでとうございます。疑問を見つけ、考えてみることへの意欲と自信の根幹を作ってくれたこの「科学の芽」賞が、これからもたくさんの小中高生のみなさんの考える喜びや楽しさで溢れることをお祈りしております。

(第6回・7回・8回受賞者 田中 琴衣 大阪医科薬科大学 医学部 4 年生)

「科学の芽」 賞で得た経験と成長

私が「科学の芽」賞をいただいたのは、中学校１年生から３年生の時でした。研究を始めたのは、小学校１年生の夏休みの自由研究が最初で、「科学の芽」賞をいただいた植物の“つる”の研究を始めたのは、小学校３年生の夏休みからでした。

「科学の芽」賞をいただいたことで、自分の研究に対してはもちろんのこと、自分の興味や活動を多くの方に認めていただけたという事実が、自分自身にとって大きな自信になりました。

授賞式では、受賞者の皆さんと交流する機会や、永田学長とお話できる貴重な機会をいただき、多くの刺激を受けたことを鮮明に覚えています。特に、永田学長に当時の将来の夢をお話した際には、強く背中を押してくださる言葉をいただき、今でも心に残っており、大切にしています。こうした経験が、進学先に筑波大学を選んだ大きな理由の一つになりました。

当時、地元の公立中学校という限られた世界で生活していた自分にとって、全国で研究に取り組む多くの学生が応募する「科学の芽」賞で受賞できた経験は、非常に誇らしいものでした。それまで見ていた世界から視野がぐっと広がり、さまざまな物事に興味を持つ視点や、行動する勇氣、新たな一歩を踏み出すきっかけをいただきました。

こうして広がった学びの世界は、今でも私の大きな原動力になっています。「科学の芽」賞でいただいた経験を力に、これからも自分の興味が深めながら、成長していきたいと思っています。

(第11回・12回・13回受賞者 大川 果奈実 筑波大学 人文・文化学群 日本語・日本文化学類 4 年)

科学の花を咲かせよう

「科学の芽」賞の存在を初めて知ったのは小学校低学年のときでした。思えばもう約 10 年が経ちますが、今でも当時の楽しく研究していた日々を鮮明に思い出します。身近な物事に小さな疑問を持ち、それについて探究していく姿勢は一生ものとなりました。

自分は今、海外大学を目指して浪人しています。この道を自信を持って選べたのも科学の芽で養った”当たり前”、”普通”について疑問を持ち、自らの力で正しいと思う選択をする力のおかげだと確信しています。

自分が生まれた年である 2006 年に始まったこの「科学の芽」賞に長い間関わることができてとても嬉しく思います。現代はスマホ一つあれば大抵のことはなんでも調べられるし、最近では生成 AI に質問すれば完璧な返答を得られます。時代は大きく変わりましたが、人間のなぜ？どうして？が失われることはこの先も間違いなくないだろうと思います。一人一人の科学の芽が花になって今の世界がより明るくなることを願っています。

(第11回・12回・13回受賞者 雨宮 龍ノ介 フリーター)

「科学の芽」から続く研究生生活

新型コロナウイルス感染症の拡大で外出が制限され学校が一斉休業となった中学三年生を迎える春、忽然と現れた家で過ごす時間で普段から疑問に思っていることを調べられるのではないかと思い立ちました。

当時、趣味の天体観測で月面を時折観察していましたが、隕石の衝突でできたとされる月面クレーターが、中からの衝撃で陥没してできる地球の火山の火口・カルデラとそっくりであることがとても不思議でした。そこで、月面マップや地理院地図を用い、計測からその関係性のグラフを得、類似性や共通点について仮説を立て、小麦粉を地表面に見立てたクレーターモデルを作って実験検証を繰り返し行い、考察したことをまとめました。この一連の探求を「科学の芽」賞という形で評価していただけたことが、当時の閉塞感とも相まってとても嬉しかったことを覚えています。

高校生になってからも同分野での探求を続けると同時に、その結果や得られた考察を誰にでもわかるように客観的に表現することも、日本天文ジュニアセッションで発表したり JSEC でプレゼンテーションの場を得たりすることで学んでいったように思います。

現在在学中の大学では、新たに大きく関心を寄せている精神神経科学で研究に携わり始めましたが、「適切なデータを得て仮説を立て、さらに検証・考察を重ねて客観性・再現性を持たせていく」という基本的な姿勢は「科学の芽」で評価いただいた時と変わりません。同時に今は、研究結果が社会の中でどのように活用され得るかを考えながら日々の研究生生活に邁進しています。

(第15回受賞者 山田 優斗 東北大学医学部医学科)



先輩受賞者からのメッセージ

第20回受賞者に向けてメッセージをいただきました

受賞おめでとうございます！身の回りの事象に疑問を持ち、考え、工夫する姿勢は、これから先の人生をきっと豊かにしてくれることと思います。「科学の芽」を見つけたみなさん一人ひとりが、将来、社会の一隅を照らす存在として、ますます活躍されることを願ってやみません。

第1回受賞者 古川 詩織

この度のご受賞、誠におめでとうございます！

「科学の芽」賞を受賞して20年、今もなお研究を続けております。科学と接するきっかけを与えて下さり、心より感謝申し上げますと共に、今後の益々の発展を祈念しております。

第1回受賞者 佐川 夕季

皆さんの発想力はすごい！以前、「科学の芽」賞の皆さんの作品を拝見する機会があり、その独創的な視点や発想、そして一つひとつの取り組みに込められた情熱に感動しました。思い通りにいかないことや試行錯誤の連続に悩むこともあるかもしれませんが、その過程こそが必ず皆さんの力となりますし、その研究を聞いた方にも大きな刺激と影響を与えていると思います。これからも皆さんの研究の成果に触れられることを楽しみにしています。

第2回受賞者 佐藤 三依（日本アイ・ビー・エム株式会社）

「科学の芽」賞を目指す方々へ

身の回りで不思議に思ったことをそのままにせず、謎が解けるまでひたすらに考え続けてみて欲しいです。謎が解けた時の爽快感は格別です。

第2回受賞者 小田島 華子

私は中学生の夏に「科学の芽」賞と出会い、緊張で顔を強張らせながら、研究発表をしました。あの頃、自由研究は学校の宿題だからするという考えでした。しかし、19年が経ち、大人になった今、あの頃に培われた研究する力が生きていく上で自分の強力な武器になっていることに気が付きました。

第2回受賞者 八田 みなみ

当たり前と思われていたことに「なぜだろう」と思う。それが自分を、世界を変えることをこの賞と朝永振一郎博士が教えてくれました。私の「科学の芽」は、毎日見てきた庭のクリの木にありました。身近な世界に、まだ見ぬ宝物を探す子どもたちがさらに増えることを願っています。

第1.2.3回受賞者 渡部 京香

子どもの頃、理科の実験や図画工作が大好きでした。手を動かしながら考えることで、頭の中だけでは見つからなかった答えがあるからです。

「なぜ？」と問いかける探究心は、将来どんな道に進んでも、きっと新しい発見につながります。ぜひその心の中の「なぜ？」を大切に、探究を続けてください。

第5回受賞者 東 弘一郎（筑波大学芸術系）

身の回りの自然科学に対する「なぜ、どうして」というふしぎだと思ふ気持ちが湧いてくることがあるでしょう。インターネット等の情報が必ずしも正しいとは限りません。ふと立ち止まって自分の手を動かして観察し、よく考えてみてください。この経験が皆さんの今後の大きな糧となるはずです。

第5回受賞者 湯本 景将

第20回「科学の芽」賞を受賞された皆様、このたびはおめでとうございます。「科学の芽」が宿るのは皆様の心の中ですが、その芽を育て花を咲かせるためには、家族や友達、先生といった周囲の人たちから受け取る栄養が大事になります。今回の受賞を機会に、皆様の研究が将来花開きますよう、祈っております。

第5回受賞者 岡崎 めぐみ（東京科学大学）

「科学の芽」賞にはご縁があり、3回選んで頂きました。発表会で紙吹雪が舞う演出をして下さったり、懇親会でお話して頂いたりしたことはとても良い思い出です。この賞を頂いてから、疑問や仮説をもって考えてみるのがさらに楽しくなりました。

これから賞を目指すみなさんも、ぜひ楽しむ心を大切に取り組んでみてください！

第6.7.8回受賞者 田中 琴衣（大阪医科薬科大学 医学部4回生）

受賞者のみなさま、おめでとうございます。わたしの受賞当時を思い返すと、朝永先生の言葉にある「科学の花」のその先に、科学の実や種があっても面白いな、と空想していました。いまや、わたしたちがその「科学の種」をまく立場かもしれません。これから「科学の芽」賞をめざす子どもたちと一緒に応援していきましょう。

第8回受賞者 前垣内 舜（株式会社日立ハイテク）

人生では、1 回の機会が、自分の想定を超える場面へ発展することがあると思います。
誰もが研究を始めたのは、不思議に思うことや、調べてみるという、小さな判断と、小さな機会を大切に
したからです。
AI や他者に判断を任せず、自分で考えることを恐れないことにしましょう。機会を掴み取りましょ
う。そして、次の場面を目指しましょう。

第 9.11 回受賞者 田中 拓海

私にとって「科学の芽」賞での挑戦が、研究者やエンジニアとしての出発点でした。
「なんでだろう？」を迫りかける想いは、未来を広げる力になります。
まずは一歩、踏み出してみましょう！

第 12 回受賞者

「科学の芽」賞への参加を通して、才能ある学生の皆様がもっと研究活動を好きになっていくことを祈
っております。そして、子どもたちが育つ環境をつくることに、「科学の芽」賞が貢献していくことを期待し
ております。

第 12 回受賞者 山下 龍之介

コンクールへ向けて自分の研究を「振り返ってまとめる」ことも、新たな発見につながる大切な研究のプ
ロセスだと思います。頑張ってください！

第 12 回受賞者 中尾 太樹

研究は地道なことがほとんどです。似たような実験を毎日繰り返すことはとても大変なことです。かとい
つて、自分の思うような結果が出ないかもしれません。でも、やり続けることに意味があると思います。その
力は必ずこれからの皆さんの役に立ちます。この賞に挑戦する皆さんは素晴らしいです。ぜひ頑張ってく
ださい！

第 12 回受賞者 伊東 実聖（横浜国立大学）

皆さんは考えることを楽しんでいますか？ジュースを飲みながら考えた疑問を追いかけた中 3 の時のワク
ワクした気持ちを、私は今でも覚えています。ふと心に浮かぶ「なぜ？」—それはあなたの好奇心が生む宝
物であり、世界でたった一人の持ち主です。皆さんの疑問が広げる楽しい研究に出会えることを楽しみにし
ています。

第 12 回受賞者 宮内 唯衣

「好き」「楽しい」と思えることを大切にしてください。もしそう思うものがまだ無ければ、とにかく何に
でもチャレンジしてみてください。

第 8 回・10 回・14 回受賞者 片岡 柊人

自由研究を始めたきっかけが、ほんの少しの興味や好奇心でも、自分の将来進む先が自由研究と全く関係
無かったとしても、頑張ったことは、必ず将来自分の財産になります。「科学の芽」賞を目指して、沢山研究
と向き合った時間は、素敵な武器になると思います。
これからも自分の思うままに、自由に研究を楽しんでください！

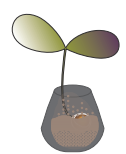
第 11.12.13 回受賞者 大川 果奈実（筑波大学 人文・文化学群 日本語・日本文化学類 4 年）

当時、小学生だった自分は夏休みのほとんどの時間を「科学の芽」賞の自由研究に捧げていました。中学、
高校と学年が上がるにつれて、受験勉強などで研究に使える時間が減っていましたが、研究に取り組む姿
勢と情熱は一生物として手に入れられました。ぜひ自分の好きなことを好きなだけ研究してください。

第 11 回・12 回・13 回受賞者 雨宮 龍ノ介（フリーター）

研究活動は大きな実験室や高額な装置がないとできない、そう思っていた時期がありましたが、身近な疑
問やアイデアを研究することを評価してくれるのが「科学の芽」賞でした。今になってみると、小中高生に
しかできない発想、疑問からの研究がいかに貴重なかがよくわかります。ぜひチャレンジしてみてください！

第 15 回受賞者 山田 優斗（東北大学医学部医学科）



「科学の芽」賞と子どもたちの「好き」を一緒に応援しませんか？

朝永振一郎記念「科学の芽」賞×クラウドファンディング

寄付者一覧（お名前掲載のご許可が得られた、水サポーター・土サポーターの皆様）

〔個人〕

浅野_(谷) 英里香

20th Anniversary

梶山 真美

20th Anniversary

加藤 光保

20th Anniversary

黄田 崇

20th Anniversary

小林 汎

20th Anniversary

歳森 敦

20th Anniversary

千葉 親文

20th Anniversary

呑海 沙織

20th Anniversary

中内 靖

20th Anniversary

西尾チヅル

20th Anniversary

野手 弘一

20th Anniversary

濱本 悟志

20th Anniversary

益戸 正樹

20th Anniversary

升野 伸子

20th Anniversary

和田 恒彦

20th Anniversary

〔法人〕



栄光電気株式会社



株式会社ジアース教育新社

20th Anniversary

松本建設株式会社

20th Anniversary

こちらにお名前を掲載していない方も含め、
応援して下さったすべてのサポーターの皆様に、心より感謝申し上げます。



編集後記

「科学の芽」賞が 20 周年を迎えるのを機に、実行委員会では、できるだけ多くの受賞 OB・OG と連絡を取ることを考えました。第 20 回の表彰式・発表会に彼らを招き、受賞者やこれから「科学の芽」賞を目指す子どもたちの「応援団」を作ることを目指したのです。一方、当日参加できない OB・OG の方からも、広くメッセージをいただこうと考え、「20 周年記念誌」の作成を決めました。表彰式・発表会にご参加いただいた皆さん、記念誌に寄稿・メッセージをお寄せくださった皆さんに、厚く御礼申し上げます。

加えて、この記念誌には「科学の芽」賞の創設に尽力された谷川元教育長や小林元教育長補佐、朝永記念室との関わりでご支援くださった金谷先生・受川先生・山崎先生からご寄稿もいただきました。そのほか「科学の芽」賞 20 年間の沿革（年表）や受賞者の歴代集合写真なども盛り込み、充実した内容となりました。このような記念誌の構成・デザインには、事務担当の當房さんの多大なる尽力があったことを申し添えます。

また、この取り組みが実現できたのは、クラウドファンディングをはじめ様々な形でご支援くださった皆さまのおかげです。ここに厚く御礼申し上げます。OB・OG をはじめ皆さまのお力を借りながら、「科学の芽」賞は、さらに先へと歩みを進めてまいります。引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

「科学の芽」賞実行委員会 副委員長 梶山 正明

書名：「筑波大学朝永振一郎記念「科学の芽」賞 20 周年記念誌」
発行日：2025（令和 7）年 12 月 21 日

発行者：「科学の芽」賞実行委員会
編集・デザイン：當房美恵子
印刷：プリ・テック株式会社

協力：「科学の芽」賞を支えた先輩の実行委員
「科学の芽」賞を受賞された OB・OG

連絡先：「科学の芽」賞実行委員会事務担当

住所：東京都文京区大塚 3-29-1

電話番号：03-3942-6806

メールアドレス：kagakunome@un.tsukuba.ac.jp

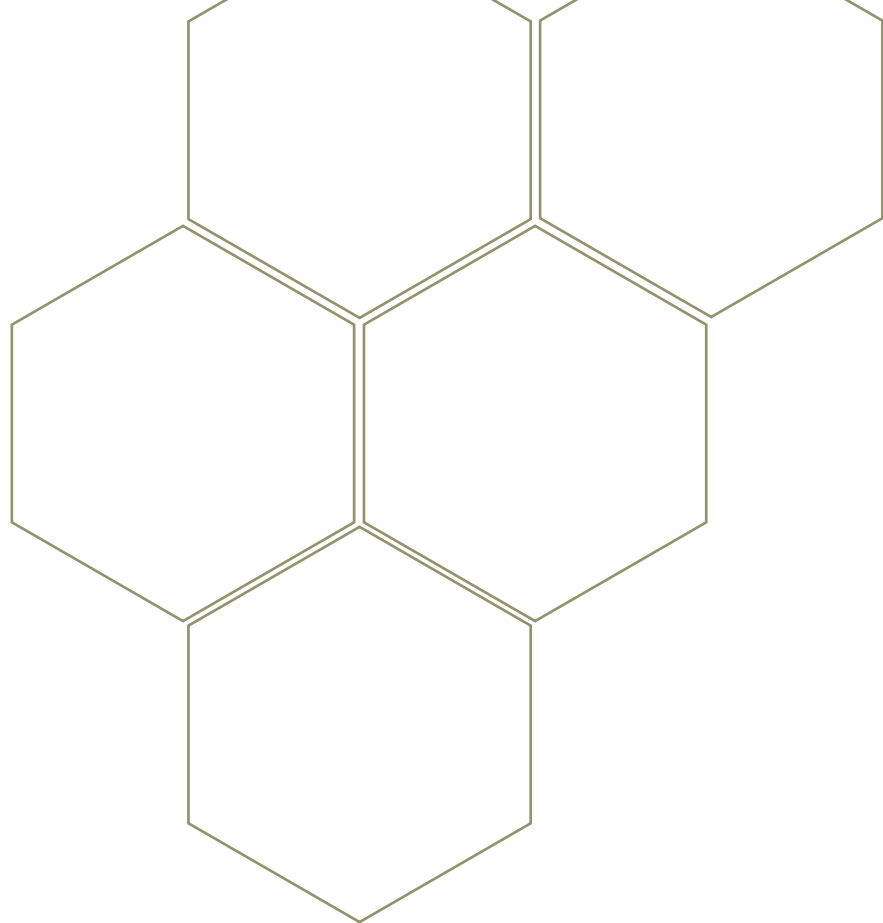
Web サイト：https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/

※本誌に掲載された文章・画像等の著作権は、制作者に帰属します。無断での転載・複製はご遠慮ください。

※表紙の写真：朝永記念室所蔵 撮影：千葉浩志氏

※表紙の式：朝永記念室所蔵の色紙より 朝永-Schwinger 方程式

※裏表紙の言葉：京都市青少年科学センター所蔵の色紙より



ふしぎだと思うこと
これが科学の芽です

よく観察してたしかめ
そして考えること
これが科学の茎です

そうして最後になぞがとける
これが科学の花です

朝永振一郎



筑波大学
University of Tsukuba